

霧島市におけるオオホシハジロ *Aythya valisineria* の 鹿児島県初記録

加藤 銀次

The First Record of Canvasback *Aythya valisineria* for Kagoshima Prefecture, in Kirishima City

KATO Ginji

キーワード：オオホシハジロ, *Aythya valisineria*, 鹿児島県初記録, 霧島市

はじめに

オオホシハジロ *Aythya valisineria* (以下, 本種) は北米に生息するカモ科鳥類である (氏原・氏原, 2015)。日本では稀な冬鳥として主に関東以北に飛来する (氏原・氏原, 2015)。

国内の九州以西の地域においては, 福岡, 長崎, 熊本, 沖縄島で記録があるとされる (日本鳥学会, 2012)。しかし, いずれも写真などの客観的証拠を伴った学術報告はなされていない。鹿児島県では, 本種は過去に記録されていない (日本鳥学会, 2012; 所崎・山元, 1999)。筆者らは2017年12月, 霧島市で本種と思われるカモ類1個体 (以下, 本個体) を観察・撮影したので, ここに報告する。本記録は鹿児島県初記録であり, 本稿は九州以南における本種の確実な記録として初めての学術報告となると思われる。

1 観察者名

迫田辰雄 (初認・終認)・熊谷正弘・加藤銀次・加藤卯月ほか

2 観察状況

本個体は2017年12月1日から2017年12月30日の期間, 鹿児島県霧島市隼人町真孝の干拓地内の調整池 (31° 71'87"N, 130° 72'44"E付近) にて観察された。調整池は干拓地南部に位置し, 周囲はコンクリートにより舗装されていた。筆者が観察した2017年12月10日には, 水が引いて島状になった池底の一部が現れていた。

3 形態に関する記述

本個体は, 行動を共にしていたホシハジロ *A. ferina* に体色が似ていたが, 体のサイズが大きく, 頸が長かった (図1, 2)。頭から頸にかけては褐色で, 嘴は一様に黒く大きかった (図1)。頭頂から嘴先端にかけての形状はホシハジロと異なり, 直線的であった (図2)。虹彩は黒く, 目の周りは白っぽかった。体上面と脇・腹の体羽は灰白色で, 波上の黒斑が密に認められ, 褐色の羽が混在していた。腰から尾にかけては黒褐色であった。翼は全体的に暗灰褐色で, 風切の灰白色部が翼帯となって見えた。初列風切の先端と外側次列風切の先端付近は黒っぽかった。胸は黒褐色で, 腹は白かったが, 粗く不規則な褐色の横斑が認められた (図3)。雨覆や小翼羽は風切よりやや暗い灰色で, 褐色味があった。脚は青灰色で, 趾の間には蹼があった。

4 種を同定した規準

本個体はカモ類の1種で, 嘴が黒いこと, 頭部が褐色であること, 背や腹が白~灰色であるということから, ホシハジロまたはオオホシハジロの雌と考えられる (氏原・氏原, 2015; 真木ら, 2014)。ただし, 前述の通り本個体はホシハジロより明らかに体が大きく, 頸が長かった。さらに, 嘴が大きく, 頭頂から嘴にかけての輪郭がなだらかであったことから, 本個体はホシハジロ雌とは区別でき, オオホシハジロ雌であると考えられる (氏原・氏原, 2015; 真木ら, 2014)。なお, ホシハジロ雌には一般的に嘴に青灰色部が見られ, 嘴が一様に黒いオオホシハジロ雌と異なる。本個体の嘴はオオホシハジロ

口に一致するが、時期や齢によってはホシハジロ雌も嘴が一様に黒いため、ここでは参考に留める（氏原・氏原，2015；真木ら，2014）。

また、本種はアメリカホシハジロ *A. americana* との交雑例が知られ、嘴にわずかに青灰色の斑が見られる場合、交雑の可能性があるという（氏原・氏原，2015）。本個体にはこのような特徴は見受けられず、他に交雑を疑わせる特徴がないため、交雑個体ではないと考えられる。

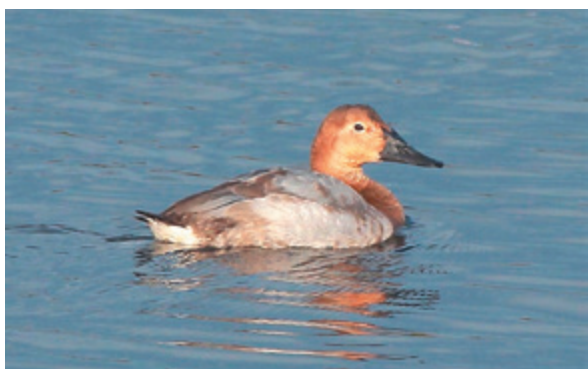


図1 霧島市で観察されたオオホシハジロ
(2017年12月10日 撮影：加藤銀次)



図2 ホシハジロ（左の2羽）との比較
(2017年12月10日 撮影：加藤銀次)

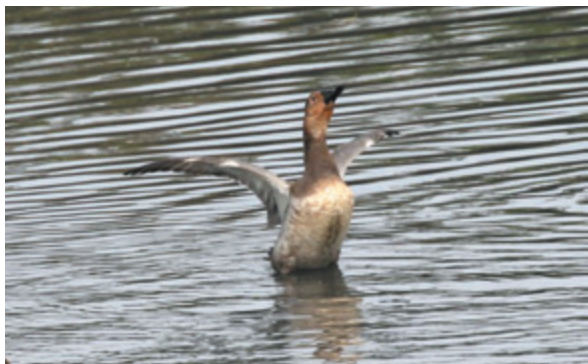


図3 オオホシハジロの腹面観
(2017年12月4日 撮影：熊谷正弘)

5 観察した行動

本個体は主に複数のホシハジロとともに行動していた。水面に浮かびながら睡眠を取り、時折羽繕い

をしていた。また、調整池内の水の引いた池底の泥地で採餌する様子も観察した。鳴き声は確認できなかった。

6 過去の記録とその文献

国内における本種の観察例は関東以北に多い（氏原・氏原，2015）。九州以西での記録については前述の通り、日本鳥類目録第7版に福岡、長崎、熊本、沖縄島での記録が掲載されている（日本鳥学会，2012）。しかし、福岡での記録は、福岡県レッドデータブックの福岡県鳥類目録には掲載されていない（福岡県環境部自然環境課，2001）。同書の鳥類分科会委員の岡部海都氏によると、写真のある観察記録は数例あるものの、全て種の同定に疑義があるため、目録には採用されていないという。沖縄島での記録については、沖縄野鳥研究会（2010）に3例の記録（1981年1月，1983年2月，2000年1月）が掲載されている。しかし、いずれも写真や同定根拠は掲載されていない。これらのうち、1983年の記録は Mc Whirterら（1996）に詳細が記されているが、これにも種同定の根拠となる写真や記述は見当たらない。熊本、長崎の記録についても検証可能な文献を確認できなかった。本種はホシハジロとの誤認が多く（氏原・氏原，2015）、識別には慎重を要する。以上に取り上げた九州以西における記録は、再検討が必要であると思われる。

7 考察

本個体は腹部に褐色の羽が見られた。これらの羽は幼羽であると考えられ、本個体が当年生まれの幼鳥であることを示唆する（氏原・氏原，2015）。主に北米に分布する本種は、繁殖期はアラスカからカナダ・北アメリカ中西部、冬はアメリカ合衆国南部からメキシコで過ごす（桐原ら，2009）。また、日本・ロシア北東部・韓国・台湾などの東アジアや、イギリス・アイスランド・オランダなどヨーロッパへの飛来が知られる（Brazil，2009；Svensson et al.，2009）。国内において本種は3月から11月の記録が多く（氏原・氏原，2015）、本記録もこの時期にあたる。また、本種のような北米大陸産カモ類の日本への迷行のメカニズムとして、「鏡像ルートの渡り」による飛来が考えられている（Young Guns，2014）。本個体の詳しい飛来要因は定かではないが、以上に述べた記録時期と本種の移動性の高さから、本個体は自然飛来であると考えられる。

観察地である霧島市の調整池は、ホシハジロ、キ

ンクロハジロ *A. fuligula* といった潜水採餌を行うカモ類が多数飛来し、越冬する。本種の基本的な習性はホシハジロに似ている(氏原・氏原, 2015)。したがって、同地のようにホシハジロが多く越冬する場所では、今後も発見される可能性がある。

謝辞

本個体の発見者である迫田辰雄氏には、本個体の初認日及び終認日を教えていただいた。九州以南における記録状況を調べるにあたっては、池長裕史氏、岡部海都氏、山城正邦氏に各記録の詳細や貴重な文献をご教示いただいた。所崎聡氏には、池長氏と連絡を取っていただき、本稿の執筆に際して有益なご助言を賜った。また、熊谷正弘氏からは貴重な写真を提供していただいた。以上の皆さまに厚くお礼申し上げます。

引用文献

Brazil, M. (2009) *Birds of East Asia*, 528pp. Christopher Helm, London.

福岡県環境部自然環境課 (2001) 鳥類. 福岡県の希少野生生物 - 福岡県レッドデータブック 2001 植物群落・植物・鳥類・哺乳類 - :199-232.

桐原政志・山形則男・吉野俊幸 (2009) 増補改訂版 日本の鳥 550 水辺の鳥, 367pp. 文一総合出版, 東京.

真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014) 日本の野鳥 650, 788pp. 平凡社, 東京.

Mc Whirter, DW.・池長裕史・五百沢日丸・庄山守・髙原健二 (1996) 最近の生息状況と参考記録を含めた沖縄県産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要 (22) :33-152.

日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録7版, 438pp. レタープレス株式会社, 東京.

沖縄野鳥研究会 (2010) 改訂版 沖縄の野鳥, 367pp. 新星出版株式会社, 沖縄.

Svensson, L., Grant, P. J., Mullarney, K., & Zetterström, D. (2009) *Collins Bird Guide 2nd edition*, 445pp. Harper Collins, London.

所崎聡・山元幸夫 (1999) 鹿児島県産鳥類リスト. 鹿児島県立博物館研究報告 (18) :21-42.

氏原巨雄・氏原道昭 (2015) 決定版 日本のカモ識別図鑑, 303pp. 誠文堂新光社, 東京.

Young Guns (2014) Young Guns の野鳥ラボ #15 迷鳥と迷行. BIRDER vol, 28(6) :48-50.

